

■ ■ 塚処と氏神と ■ ■

< I >

盆踊り、盆狂言の事実から、ひいて一般の氏神の祭礼狂言が、一方神社すなわち氏神と、広義の墓地であった塚処に対照をもっていたところから、さらに塚処と一般の墓地、氏神について、その間の関係における事実を索めることもまた必要と考えられる。しかもまだ事実の上に、その関連は残されていて、この地方ことに北設楽郡内の事実では、氏神あるいは一面に墓地すなわち三味の延長とする如き痕跡も認められるのである。これは仮に一地方の異例に過ぎぬとしても、また当然考えねばならぬ問題であった。

事例の第一は前にも言った古戸であるが、現在同地内氏神と^{ふつと}考えられている八幡神社は、明治年間にいたって氏神と定められたもので、その位置も社殿もすべて以前の清水観音である。よってこれが以前の土地のいわゆる産土神でなかったとすれば、それに当たるのはむしろ白山権現かあるいは熊野神社であるが、これらはともに今は末社として祀られてある。もちろん八幡社は古くから祀られてこそあったが、これはむしろ清水観音に付随したものであった。

次には、前にやはり引合いに出した同じ郡内本郷町の中在家である。現在同所の表面上の氏神は本郷町の諏訪神社であるが、これは近年部落合併の結果こうなったもので、その以前の氏神は、同所に祀られてある熊野神社である。しかしこれとて明治三年長峯より遷座以来のことで、対氏子関係から言えば長峯熊野神社に属していたわけであるが、これもいずれかと言うと観音堂の方が主であった。現在の社殿のある地は、一に笠神とも言うが遷座の前は金比羅宮が祀ってあったらしく、今もその跡は別に遺されていて、多くの石仏または五輪を祀ってある。感じから言うと卵塔場であったようである。

中在家の隣村三ツ瀬等も、現在は同じ本郷町諏訪神社の氏子であるが、これも村落合併前までは何ら関係のなかった地で、土地の氏神としては明治初年までは観音堂であった。近年火災にあつて以来、境内等も修築して、いくぶん神社らしい形式を備えたが、なお氏神とするより観音堂の方が一般に通っている。



第55図
盆踊りの団扇
(本郷町三ツ瀬)

さらに北に進んで豊根村下黒川の郷社津島神社も、安政二年〔一八五五〕同所に神樂の行われた当時は、神社と言うよりむしろ観音堂として認められていたのである。

<Ⅱ>

こうして数え立ててゆくと、現在各所の産土神として、何々神社等と称していたものの大部分は、つい近世まで、前言った鳳来寺大野等における金剛堂または千日堂に類するものであった。もちろん古くからそこには観音堂、金剛堂等に、熊野、白山等の併せ祀られてあったことは言うまでもないが、この地に堂なり神社を設けた動機は、仏教の影響の及ぶところ当然の地だったと考えても、不思議はない事実がある。

郡内振草郷の総社として、今に伝説に残る御殿村葭瀬〔現、東栄町〕なども、ここに神社が存在したとすれば、単に別当意識の影響とのみは断ぜられぬ、むしろ寺院に近いものではなかったかと思う。伝説によると、一年村民祭りのことから論争して社殿を取り毀ち、それぞれ吾土地に持ち帰って祀り、以来七郷に分かれたと称し、宝明神、扉明神、釘明神、金具明神等の神々に分かれたと言うが、一方そのとき社殿を、取り払って移ったのが、今の田口町の福田寺である。

この事実は各所の寺院にも当て嵌めて考えることができる。現在村々の寺院には近世にいたっていわゆる寺院としての格式なり所属の定まったものが多く、その以前は観音堂、十王堂のいわゆる念仏堂であったようである。

現今の御殿村字加賀野〔現、東栄町〕^{かぎの}楽一^{にやくいち}王神の社殿なども、加賀野の氏神と考えられて、県道傍に立派な社殿となって祀られているが、これももちろん近世の事実で、「御殿村誌」の記すところによると、嘉永六年（一八五三）一月初めて社殿を築造せるもので、その以前はただ一本の杉の大樹があっただけである。社号楽一神にしても、「三河国官社私考」に、

従四位下土穴明神。^{ハムナ}設楽郡楽一ノ一社アリ。中井氏言フ。月村の分郷加賀野村「ハナ」ノ神社是レカ

とある記事から、すべて楽一王神と定めたと考えられる節もあるが、古くより、「にやくいち」また「ひやくいち」といい、一に子安地藏または子育て地藏大師とも称し、社殿建立前は、一株の杉の大樹を神体として祀っていたという。その杉は嘉永六年社殿建立と同時に伐り取ったが、根株の周囲五丈八尺あったと言っている。一方社殿は元治元年（一八六四）焼失し、明治三五年四月現在の社殿を造営し、以来安産大神と改称したと同じく村誌にある。

一説にはこの杉は神木として存在せるもので、社殿はすでに万治元年（一六五八）に改築の事実あり、神像は行基の作とも言うが、いずれにしても木を祀りその根元にて祭りを行ない、これを木の根祭りと呼んだとする説は同じである。

樹木を神体とし、その下にて祭りを行った説は他にもあって、同村月の^{つき}槻神社等も、現在は熊野神社と称しているが、これは近世移転せるもので、以前は同所の上のはずれにあり、槻を神体として祀り、かねてその根元で祭りを行ったと伝えている。

さらに豊根村^{かほれ}字川宇連^{ゆきよし}の尹良神社等も、社殿の築造されたのは僅々二〇年以内の事実で、その以前は何らの建物もなく、「はなの木」と称する神木があったのみで、例年五月一日を祭日として、その根元で祭りを行っていた。その一年間に嫁いだ婦女がすべて婚礼当夜の装束をなし、行列に加わったものと言っている。そして、「はなの木」は、尹良王杖立ての伝説あるもので、現在数本を数えるが、四月中旬に紅の花を開いて壮観であると言う。故老の説によると、以前はそのうち最も大なるものと並んで桧の大樹が茂っていたが、徳川末期その桧を伐って後、大なるものは風で枯れてしまったと言う。なお木の根祭りのことは、静岡県地内、西浦の観音堂の行事にも同様な説があり、ここでは銀杏であったことはすでに言った。

<Ⅲ>

以上言ったものは、いずれも単なる塚処または観音堂あるいは樹木を祀ったものが、やがて神社または氏神として祀られるに至ったものだが、その事実の一方には、今もなお昔のままに、墓地または塚処として、そのままに残されていたと考えられるものもあったのである。その事実を一通り言ってみる。

私はこの数年来、三河北設楽郡を中心とした地域を、何回となく歩く機会を得たが、この地方を歩いていて気をつくことは、山間の村という村の、出端れやあるいは境などの、自然に岩層等の露出した地点を選んで、きまって沢山の石仏の類が祀られてある。それらの場所は、あたかも「なぎ」の跡でもあるのか、地表が皮剥ぎ取られて、崖のようになったものもあるが、多くは巨岩が高くわだかまっていたり、あるいは地表から岩頭が露出したものもある。こうした地形を一に「あれ」または「あらし」等と言ったが、これを要するにただの草生や森林の中ではないことである。

どうしてこうした場所を選んで石仏の類をおいたものか、それらについてはもう言い伝えのほどもわからない。村の人に訊ねても、ただ観音様といっている以上は知ることを得

ぬが、石仏の数が多いだけ、そこには三三体の観音様がかならずある。これは修験道の旺んな地であっただけ、その影響もあるらしいが、その他の仏像ももちろんある。地藏尊、賽の神、金比羅、庚申像、道陸神、馬頭観音と、そうして決まっているいわゆる行者の像がある。およそ路傍で目撃する石仏の類は網羅されていて、なかにはただの墓碑も三つ四つはかならずあり。その他石棒あるいは天然の丸石等もおかれてある。もちろんこれらの中には、後に至って持ち込んだものもあるであろうが、いずれにしてもこの地方の情景の一つの特色と言える。たとえば郡内下田村下田〔現、東栄町〕の村端れ、それから川に沿って下って、字三つ石から川角に渡る橋の傍には、巨大な岩が聳え立っているが、この岩の上にも、三三体の観音像や賽の神の像が、道から見える位置に置いてある。石仏の間には、小松が根を張って生い立っている。

さらに例をあげるならば、振草村黒倉〔現、設楽町〕の、峠から下って行った入口のもある。同じ村の布川の県道脇にも、岩窟のような位置を選んでたくさんの石像石碑がある。それから古戸にはいると、村の上と下との中間、寺の脇の道路に向かって、突き出した岩を囲んで、各種の石像が林立している。

<四>

前にも言った如く、こうした場所の名称はどこでももう聞くことはできなかったが、古戸には明らかに卵塔場という名がある。古戸は土地の開発も古いと言われているから、他の土地とはおのずから根源に相違があるかも知れぬが、言い伝えによると、昔はここで死人を火葬にしたもので、それで卵塔場のながあり、従って墓碑も立っているという。そして一株古い桜の大木が、それらの墓碑の間から伸び上っている。それやこれやを思い合わせると、この桜の古木も気になってくる。話は別であるが、この地方の盆踊りの歌に、

吾親を干駄たきぎに積みこみて

立つよ煙が白雲となる

というのがあつた。ここの情景を考えに入れると、言伝えの根が、さまざまに想像されてくる。

こうした場所に、桜が茂っていたところが、別にもう一カ所ある。同じ村内大字粟代の端れで、さらに山奥の小林に通ずる路傍である。断崖面にたくさんの仏像がならんでいて、そこにさほど大きくはないが桜の木があつた。通行にはちょうどその根本を踏むのである。

小林の地内へは行ってからは、ずっと奥の村端れに、大杉というところがある。夥しく巨岩の重なり合った地点が、やはり同じような場所である。ここにもかつて卵塔場らしい

痕跡があって、墓碑がたくさんある。各種石仏の間に、思い思いに立っているのである。村の人はめいめいの墓地のほかに、別にここにもまた墓石を建てる風があったのである。あれが手前の家の祖父の墓だと、最初に案内してくださった片桐保次郎さんが指したのは、岩の上の新しい一基の墓碑であった。このすぐ前が山沢で、その向かいに役の行者の修法の跡があり、そこに以前巨きな杉があったので、かねて地名になったと言う。

ちなみに私が生まれたのは、ここから言うと、はるかに平地に近かったが、高足駄一本歯の行者像は、付近いずれの村にも祀ってあった。その位置が定まって嶮しい岩窟または岩頭で、村端れなどが多かった関係からか、子供心に薄気味の悪い場所であった。笑ったようなあの石像の持つ表情が、今日も目に残っているのも、そうした印象が強かったのだろう。しかも行者と言え、そうした嶮しい位置に祀られてあったのが、きわめてもっともらしく、したがって当然と信じていたが、この地方の事実を見ると、祀ってある場所は、他に因縁のあることが考えられる。これは地蔵の像なども同じであった。

そのことから思い出されるのは、小林から山を越えた田口町字小松の御堂山観音堂の由来である。今では田楽が行われて、花祭りのような鬼の舞いもあるが、昔はここに堂も何もなく、無数の石が出ている荒地であった。付近の村に葬式があるときは、死骸をそこへ運んで来て、その中のもっとも大きな平石の上において逃げ帰った。それで四辺にはそれら死人の白骨が累々として目も当てられぬ有様であった。あるとき一人の旅僧が来て、この光景を見て哀れに思い、そこに庵を結んで住み、岩頭に一基の地蔵像を刻んでそれらのものの霊を慰め、かねて衆生済度に当たったのが、そもそもの最初だと言う。

同じ郡内の園村大入は、この地方でもっとも古い土地というが、ここで卵塔場というのは、別に七人塚とも言い、古い墓碑や石仏が祀ってあるが、四辺には物凄じばかりの巨岩が重なり合ったところで、死骸を埋めるような土塊もない、草もろくに生えそうもない場所である。こうして次々に挙げたのでは、果てしがないからもう略すが、これらの地方から山を越して、平地に下るにしたがって、石仏を多く祀った塚の傍には、念仏堂の類を多く見かけるようだ。そうしてだんだん平地に入るにしたがって、寺院の脇や畑中の塚となって残り、そのために屋根が作られたりしている。鳳来寺の裏道に当たる行者返り、あるいは行者越えと言う難所なども、断崖面に三三体の観音像を始め、たくさんの石仏が立っていたが、これらの石仏を置いた動機も、その地名や伝説からは格別関連は考えられぬが、前言ったような事実には糸を索いていたことは願うてもよさそうである。

そうして一方こうした場所に、子育て地蔵または子安観音が祀られてあった理由も、将来組織的にだんだん説いてくれる人のあることを信じている。